委員名	山田洋子

委員会行政視察報告書

委員会名	民生福祉常任委員会

活動委員名		
山田　洋子　委員長	太田　正幸　副委員長	氣田　量子　委員
堰野端　展雄　委員	小川　洋平　委員	

経費区分				合計金額
1　研修旅費	2　自動車借上料等	3　議長交際費	一人当りの費用	
855,192		8,590	172,756	863,782

期間 (年月日)	令和７年７月 22 日（火）　～　令和７年７月 24 日（木）　（２泊３日）
視察事項	・岡山県総社市　「子育て王国まちづくり事業について」 ・香川県坂出市　「坂出市立病院の経営健全化の取組について」
視察先	岡山県総社市、香川県坂出市

内容及び成果

■岡山県総社市　「子育て王国まちづくり事業について」

1. 調査対象・目的

岡山県総社市が策定した「総社市こども計画」（計画期間：令和 7～11 年度）を基礎に、特徴的な取組を把握し、青森県十和田市の「第三期 子ども・子育て支援事業計画」（計画期間：令和 7～11 年度）と比較しながら、総社市の先進事例を視察した。

2. 総社市こども計画の位置づけと推進枠組み

総社市は「こどもまんなか社会」を掲げ、こども基本法・国の大綱を踏まえつつ、少子化対策、こども・若者育成支援、貧困対策を一体推進する総合計画として整理。推進は毎年の進捗評価、子ども・子育て会議への報告と必要時の見直し、広報紙・市 HP 等での情報公開という明確な PDCA で回す設計である。

3. 基本理念・基本目標の骨子

基本理念は「こころ豊かに 未来につなぐ わたしも みんなも 大好き “そうじゃっ子”」。権利保障（こどもの声が届く・守られる）、将来への希望、安心して暮らせる環境、健やかな成長について各目標を決めて、配下に施策群を配置していた。

4. 総社市の独自色

（1）こども相談 LINE と SNS 活用

こども・若者が自分の言葉で悩みを発信できる仕組みとして「総社市こども相談 LINE」を開設。日常の学校運営の場づくりとあわせ、SNS を用いた相談導線を整備している。生きづらさを抱えた層への支援でも LINE を正面から位置付け、きめ細かな対応につなげる運用が素晴らしいと感じた。

（2）学校施設の開放と実体験プログラム

学校施設・地域スポーツ等の場を開放し、こどもの主体的活動の場を拡げる方針。加えて、中高生を対象に乳幼児と触れ合う「ふれあい体験（赤ちゃん登録日）」を教育と接続し、命の大切さや将来的な自分事化を促す点がユニークである。

（3）ヤングケアラー支援の制度化

総社市はヤングケアラーの把握・支援体制を章立てで明示。こども家庭センターに「ヤングケアラーコーディネーター」を配置し、学校・福祉・医療等との連携を回しながら支援プランにつなぐ仕組みを打ち出している。実際にコーディネーターの募集も行い、体制整備を進めているところが手厚いと感じた。

（4）医療的ケア児・発達支援の厚み

発達に課題のある子への総合検診（総合健診）やペアレントサポート講座、切れ目のない支援、医療的ケア児と家族への地域支援に至るまでを整理。相談・情報発信に SNS 活用も織り込んでいる。 気おくれや悩み、日々の苦労などにも対応しているところが、素晴らしい取り組みだと感じた。

5）KPI の可視化

KPI に、権利保障の認知、自己肯定感、居場所確保、子ども食堂数、相談のしやすさ、虐待ゼロ、ヤングケアラー認知度向上などを並べ、令和 11 年度の目標値を明記。目標管理の見える化が進んでいる。

5. 十和田市との主な違いだと感じた点

1. 計画の射程

総社市は「こども施策の総合計画」として若者支援・貧困対策も内包し、こどもの権利や社会参画を強く打ち出す。一方、十和田市は法定の子ども・子育て支援計画として、供給体制と確保策の実装に重心がある。

2. 相談・参加のデザイン

総社は SNS・LINE 等で「声の出しやすさ」を制度化。十和田は伴走型相談や量確保の仕組みが中心で、LINE 等の双方向チャネルの明示は相対的に少ない。

3. ヤングケアラー対応

総社は専任人材配置まで踏み込み、学校横断の把握・支援を制度化。十和田は貧困対策や学習支援等の枠でニーズ把握・支援を進める構造。

4. 実体験・予防アプローチ

総社は赤ちゃんとのふれあい体験や学校施設開放、プレコンセプションケアまで含め、ライフコース全体の学びにつなぐ。一方、十和田は「こども誰でも通園制度」等、就学前期の利用拡大を制度的に整える色彩が強い。

6. 十和田市が参考になるポイント

1. LINE・SNS 相談の本格導入

2. ヤングケアラーの見える化と専任配置

3. 実体験プログラムの教育接続

4. 学校・公共施設の計画的開放

5. 医療的ケア児・発達支援の情報ハブ化

総社のように、医療的ケア児家庭への相談・情報提供の“入口一本化”と、SNS 等での周知を強化。保健・教育・福祉の伴走支援を一本のプランに束ねる。

6. プレコンセプションケアの導入

助産師・保健師によるライフデザイン教育や相談窓口を学校・地域で展開。母子保健のみならず、若者の心身の健康リテラシー向上に寄与。

7. “こども誰でも通園制度”の広報×相談連動

8. 施設分布の可視化と“通いやすさ”検証

幼児教育・保育施設、支援センター、放課後児童対策の地図可視化を更新。学区・交通・就労実態に照らし“空白域”の有無を点検して配置・時間拡張を検討する。

9. 相談初動の「多言語×デジタル」対応

外国人家庭への情報提供（健診、予防接種、受診、相談）を多言語化し、LINE 公式・翻訳・ pictogram 等でわかりやすく案内。総社の情報提供の工夫が参考になった。

感想

総社市は“子どもの声の拾い方”が抜群に上手いと、すごく参考になりました。

LINE や SNS を正面から使って、相談のハードルを下げているのが実務的であり、細やかな政策だと感じた。その他のところでも、女性の視点が多く取り入れられており、各戸に配布する資料も、わかりやすさに拘って考えられていたところが、素晴らしかった。

現場の声を政策に生かしているところが、十和田市と同様であるので、繰り返し現場の声を反映させる制度をつくる大切さを実感しました。

ヤングケアラーに専任まで置くというのも印象的でした。十和田市は制度実装がとても丁寧で、量見込みや確保策は行っているため、ここに“声の入口”と“見える化 KPI”を足すことが出来れば、市民に手厚い、こどもを真ん中に置いた政策になるのではないかと考え、参考したいと感じました。

■香川県坂出市　「坂出市立病院の経営健全化の取組について」

1. 目的と対象

目的：坂出市立病院の改革プロセスと実効性を、スライド資料・説明（議事録）双方から整理し、十和田市に活かせる示唆を抽出する。

対象：坂出市立病院の組織・経営改革（KPI 管理、急性期への舵、外来強化、救急体制、投資判断、人材・文化醸成など）。

2. 改革の柱

・「経営の安定は手段」という共通言語を徹底し、現場に見える化された KPI を共有→合意形成と行動変容を促進。

・患者視点（例：土曜外来）を掲げて現場の抵抗を乗り越え、集患・満足度と収益を両立。土曜日外来には医療従事者から廃止の声はあるが、継続に向け調整をしていた。

・短期間で回収できる投資（例：化学療法無菌室増設）を選択し、高度医療×診療単価向上へ直結。

・病床数を削減しつつ、急性期へ舵を切り、組織目標（在院日数短縮・病床稼働）と現場のモチベーションを整合。

・「断らない救急」と投資で受入件数を増加、地域貢献と人材確保につなげる。

3. 改革の成果

・入院・外来収益の伸長：新病院移転後 10 年で入外収益 1.8 倍。収支は原則黒字基調（コロナ期・旧病院解体費計上期を除く）。

・入院の加算：平均在院日数は 11 日台まで短縮。病床稼働率の向上を継続。

・救急・手術能力：救急車受入は 2,000 件超／年規模へ。
手術件数は 1,600 件／年、全麻は 900 件／年レベル。

・費用構造の健全化：人件費等は増加しつつも、売上の拡大（高度医療・外来強化）で人件費比率を抑制。

・人材循環：大学との関係強化により研修医の循環・定着を促進。

4. どうやったか（主に実行プロセスとガバナンス）

①共通言語の徹底と文化改革

・メッセージの反復：「経営の安定なくして良質な医療なし」を繰り返し周知。

・視覚化：「こんな勤務医はいらない（8 か条）」「こんな看護師長はいらない（9 か条）」を庁内掲示。

・ロイヤリティ醸成：清掃・行事・訓練等を通じて“この病院で働く誇り（矜持）”を育む。

②見える化のマネジメント

・数値化→目標設定→共有→達成→次目標のサイクル。

・指標例：救急車受入件数、病床稼働率（例：80%）、平均在院日数短縮、手術件数、外来収益 等。

・面談・委員会でボトルネック可視化（例：透析/外来の体制や機器更新の必要性）。

③投資判断の原則

・短期回収（1-2 年）が見込める投資を優先（例：化学療法無菌室 2→12 室増設）。

・投資に合わせて必要資源（人・機器・スペース）を整え、アウトプット（件数・品質）を求める。

・10 年先読みの不確実投資は回避し、“小さく早く回収”を重視。

④組織設計とアクション

・部会→チームへと発展させ、自律的な改善活動を支援（資金・時間を付与）。

・大学・県内病院との連携で研修医の循環と採用チャネルを強化。

・情報発信（視察受入・比較分析）で職員の当事者意識を醸成。

5. 何を改革したのか（主要メニューと意図・効果）

① 外来部門の強化

・土曜外来（公立で県内唯一）：患者利便性を前面に、医局の抵抗を「患者の声」で突破。看護の働き方（代休運用）にも好影響。半日で 100-200 人が受診し、集患と満足度を両立。

・診療単価の向上：高度医療の導入・継続で単価を高める。

② 急性期へ舵を切る

・病棟機能の明確化：急性期に注力。在院日数短縮・稼働率向上と一体で現場のモチベーションも整合。

③救急体制の強化

・断らない」を前提に、必要資源に投資（外来看護師・救急資機材等）。

・搬送困難事案への地域貢献を明示し、受入件数増と信頼の獲得。

④手術・化学療法への重点投資

・手術件数の増加：機器更新・人材配置で 1,600 件/年規模へ。

・化学療法の高度化：無菌室を 12 室へ拡充し、加算で 1-2 年回収を見込む設計。

⑤人材・文化

・“当たり前を当たり前に”の専門職倫理を再確認し、勤務態度・知識基準を明文化。

・誇り（矜持）を支えるイベントや称賛文化。

6. 取り入れやすい点

①見える化（救急受入、稼働率、LOS、手術/全麻、外来売上）を幹部・病棟・診療科で同一表示し、月次共有→四半期レビュー。

②外来テコ入れ：

土曜外来や夕診の限定導入（科を絞る）で患者利便性×集患。

単価向上に繋がる高度医療/加算の導入計画をロードマップ化。

③救急“断らない”の現実解：不足資源（外来看護師、放射・検査待機など）に点的投資を行い、受入目標に紐づけ。

④投資の選定基準：1-2 年回収の案件を優先（例：化学療法・内視鏡・手術関連機器）。10 年回収案件は再検討。

⑤人材育成：大学・近隣病院との研修/専門研修ルートを設計し、戻ってくる導線を意図的に作る。

7. まとめ

○ここが勉強になった：

・患者視点を旗にすることで、現場の抵抗を乗り越える「理由づけの巧さ」。

・数値目標を経営と現場の共通言語にした上で、投資→アウトプット要求まで一体運用して　いる点。

・医療機器の投資選定により、予算制約下でも改革を加速できる設計思想。

・急性期の目標と回復期/地域包括の目標を整理し、現場のモチベーションと矛盾しない設計にする。

○こう感じた：

・スローガンや掲示など文化への働きかけが、数字以上に職員の誇りを支え、改革の推進力になっていた。

・“断らない”姿勢と地域貢献が、結果として人材の循環や患者の信頼を呼び込んだ。

・病院の評判をあげる、選ばれる病院になることが、とても大事だと感じた。地域の病院から患者を紹介してもらう時にも、八戸や青森の病院ではなく中央病院に行きたいと、患者に選ばれる努力をすることも、経営立て直しには必要であると感じた。

・病院管理者や病院長の役割は、中央病院と大きく違い、独立した市に頼らない考えが根っこにあると感じた。それは基準内・基準外繰り出し金がもともと少ない経営をしていたためであるように思う。

今回の視察にあたり、管理者は中央病院の資料を基に十和田市の実情を整理した独自の説明資料を自ら作成していた。そこから、病院管理者は経営者であるという役割意識が明確にうかがえた。また、医者に選ばれる病院になるよう、働く満足度を高める工夫として、例えば管理者は手術が終わるまで残り必ず声をかけることが参考になった。職場の雰囲気、モチベーション、矜持、どれも一朝一夕ではない継続した取り組みであるところこそ、難しいと感じた。

最後に、市民のための病院である、という病院管理者の言葉を伺った。この言葉に、経営の安定は市民のいのちと暮らしを支えるための手段にすぎないという軸の強さを感じ、私たちも“市民のための病院”を判断基準の中心に据えて議論を深めていきたいと感じた。

委員名	太田　正幸

委員会行政視察報告書

委員会名	民生福祉常任委員会

活　動　委　員　名		
山田　洋子　委員長	太田　正幸　副委員長	氣田　量子　委員
堰野端　展雄　委員	小川　洋平　委員	

経　費　区　分				合計金額
1　研修旅費	2　自動車借上料等	3　議長交際費	一人当りの費用	
855,192		8,590	172,756	863,782

期　間 （年月日）	令和７年７月 22 日（火）　～　令和７年７月 24 日（木）　（２泊３日）
視察事項	・岡山県総社市　「子育て王国まちづくり事業について」
	・香川県坂出市　「坂出市立病院の経営健全化の取組について」
視察先	岡山県総社市，香川県坂出市

内容及び成果

別紙のとおり報告します。

・岡山県総社市　「子育て王国まちづくり事業について」

（令和７年７月 23 日（水）９：30～／総社市議会第２委員会室）

内容）

(1)総社市の概要

①人口の推移　※カッコ内は当市　2005 年 66,584 人（68,359），2020 年 69,030 人（60,555），減少率-3.6％（11.4）

②目指す都市像　岡山市，倉敷市のベッドタウンとして「岡山・倉敷に並ぶ新都心総社～全国屈指の福祉文化先駆都市～」を掲げ，目標人口を 70,500 人に設定している。また，中国地方の住み続けたい街ランキング上位の評価を得ている。

(2)「子育て王国そうじゃ」とは･･･特定の政策を行っていることでなく，行政や保育・教育関係者だけでなくＮＰＯや医師会，商工会や一人ひとりの市民など，街全体で子育てを支えるという理念（条例化）を表して称している。また，「子育て王国」と称することにより，市役所全体でそうあるべきとの矜持をもって施策に取り組めるよう，プレッシャーを自ら与える効果を生んでいる。政策の優先順位を決定する際には，子どもを最優先にし，市民に限らず子どもを大切にする取り組みを進めている。

(3)総社市流「福祉王国プログラム」

出生から就学，就労，老後まで支える以下の９つの検討部会を設置

①子ども虐待ゼロ部会･･･「地域と連携した子ども虐待ゼロのまち」を実現する。②発達障がい児支援部会･･･切れ目のない支援に向けて「中学卒業後のアクセス 100％」を継続。③ヤングケアラー支援部会･･･「ヤングケアラーの孤独ゼロ」を実現し，子どもらしく成長できる環境を整備する。④健康ゲット部会･･･主体的な健康づくりを推進し「医療費抑制 1 億円」「がん死亡率 20％削減」を達成する。⑤高齢者支援部会･･･高齢者の「見守り 100%孤独ゼロ」を達成する。⑥障がい者支援部会･･･「障がい者 1500 人雇用」を目指し，「生活の質の向上」につながる支援を推進。⑦待機児童ゼロ部会･･･「年間を通じての待機児童ゼロ」の達成を目指す。⑧ひきこもり支援部会･･･「ひきこもりからの社会参加 200 人」を達成する。⑨地域連携部会･･･各部会の重点施策を解決するために，行政と地域が役割を明確にし「地域と行政が一体的に取り組める体制」を目指す。

(4)人口７万人への挑戦･･･人口増パッケージの取組み

①結婚・出産支援～素敵な出会いと出産の喜びを分かち合う～

婚活イベント，そうじゃ出産おめでとうギフト

②子育て支援～子育て王国そうじゃのブランドを更に高める～

中学校の給食費無償化，幼稚園，小学校の給食費支援，放課後児童クラブの拡充，認可外保育施設への助成

③地域力の向上～地域・市民を大切にし，「郷土愛」を醸成する～

そうじゃ空き家対策パッケージ，自由枠交付金制度の見直し，道づくり予算（生活道の補修等）

④効果的な魅力発信

シティプロモーション

⑤そうじゃ出産おめでとうギフト支給事業

成果）

消滅可能性自治体である本市は，2050 年には 39,000 人，若年女性人口も 2020 年 5,000 人から 2050 年には 2500 人と予測され，少子高齢化対策が喫緊の課題であり，解決するべく多様な事業を展開している。しかし，その成果や予算配分の見直しをすることも重要である。

本視察では，市全体で乳幼児から高齢者まで支えるプログラムを備え，生活するうえで必要な施策を総社市では実践し，事実人口が増え続けていることが選ばれている自治体の証明ではないだろうか。今後の本市の展望に期待したい。

・香川県坂出市　「坂出市立病院の経営健全化の取組について」
（令和７年７月 23 日（水）14：30～／坂出市立病院）

内容）
坂出市立病院の経営健全化の取組概要（岡田坂出市病院事業管理者兼病院長から説明を受ける）
1. 背景と課題
・坂出市は平成３年の人口約 6.3 万人から令和５年には約 4.8 万人へ減少，高齢化率は 16%から 40%に上昇。
・坂出市立病院もかつては 13 年連続赤字，累積欠損金約 25 億円に達し，平成３年には総務省から廃院勧告を受ける。
・職員間には責任転嫁が横行し，病院全体に意識改革が必要な状況だった。
2. 再建の方向性
・「経営の安定なくして良質な医療なし」いわゆる経営の安定は決して目的ではない，それを目的に医療をするのではないが，それをやらなければ良質な医療の提供はできない，したがって，それが手段であるという風に認識させるということ。これを合言葉に意識改革を徹底。
・視覚・聴覚に訴える施策（標語掲示・理念共有・職員アンケート等）で共通認識を醸成。
・チーム制・部会制の導入による全職員参加型の改善活動。
・土曜外来の継続，患者サービス向上イベント，理念の明確化。
3. 経営改善の実績
・外来・入院収益を 1.8 倍に拡大。
・人件費や薬品費が増大する中でも黒字を維持。
・手術件数は 10 年間で 700 件から 1600 件に増加，全身麻酔手術・化学療法・透析なども強化。
・コロナ禍では積極的に患者を受け入れ，補助金活用もあり大幅黒字を計上。
・平成３年に廃院勧告を受けてたった 19 年後に優良自治体病院として総務大臣表彰を受け，「成功事例」として評価された。
4. 経営戦略の特徴
・急性期医療への集中（地域包括ケア病棟を持たず）。
・「いい医療をするために収益を確保する」という考えを職員に浸透。
・医師・看護師確保のため大学医局との交渉や看護学校への積極的アプローチを継続。
・市外患者比率が増加（入院患者の半数以上が市外）。
成果）
・病床数・職員数では当市立中央病院が約 1.7 倍規模であるが，外来収益は坂出市の方が多く，手術件数・全身麻酔件数も上回っている。
・当市は人件費率が高く（約 67%），累積欠損金は 35～45 億円と大きい。坂出市は内部留保を確保しており，将来の赤字にも備えられる体力を持っている。
・全国的に診療報酬改定の影響もあり，全国の自治体病院９割で赤字決算となっており，自治体病院の使命は「医療レベルを上げる・競う・支える」ところにあるのだという。
・経営形態変更（独法化など）は万能解ではなく，強力なリーダーシップと職員意識改革が必要で，「住民から選ばれる病院」を維持し，赤字医療と黒字医療のバランスを取ることが重要との客観的な意見をいただいた。

委員名	氣田　量子

委員会行政視察報告書

委員会名	民生福祉常任委員会

活　動　委　員　名		
山田　洋子　委員長	太田　正幸　副委員長	氣田　量子　委員
堰野端　展雄　委員	小川　洋平　委員	

経　費　区　分				合計金額
1　研修旅費	2　自動車借上料等	3　議長交際費	一人当りの費用	
855,192		8,590	172,756	863,782

期　間 （年月日）	令和７年７月 22 日（火）　～　令和７年７月 24 日（木）　（２泊３日）
視察事項	・岡山県総社市　「子育て王国まちづくり事業について」 ・香川県坂出市　「坂出市立病院の経営健全化の取組について」
視察先	岡山県総社市、香川県坂出市

内容及び成果

岡山県総社市「子育て王国まちづくり事業」について

総社市では、「子育て王国そうじゃ」のスローガンのもと、市長の肝入りで始まり、小児科医が先導して地域一体となって子育て支援に取り組む独自のまちづくりが進められている。

取組のきっかけは、地域の子育て世代を中心とした市民の声と行動であった。少子化や子育てのしづらさを自らの課題ととらえた市民が主体的に活動を始め、それに行政が寄り添い、制度化・事業化を進めたことが特徴である。市民が中心となり、行政が参加・支援する形で、まち全体が子育てを応援する機運が高まった。

主な取組としては、「こども条例」の制定、市民・企業・大学・NPO など多様な主体による「子育て王国そうじゃまちづくり実行委員会」の設立、県立大学と連携した「子育てカレッジ」の開講、医療費の使い方を工夫した「小児医療費適正化」などがある。単なる福祉施策にとどまらず、地域ぐるみで子育てを支える体制づくりがなされている。

これらの取組により、若年層の転入超過や出生率の改善といった成果が表れ、まちの魅力発信にもつながっている。「子育てしやすいまち」としての認知度が高まり、定住・移住の促進も増加しているとのことであった。

一方で、今後の課題としては、こうした市民主体の活動を持続可能なものにするための支援体制や、関係者間の連携の深化が求められる。また、社会や家庭の多様化に対応する柔軟な政策展開も不可欠である。

総社市の実践は、市民の想いから始まり、行政が伴走する形で地域社会全体が子育てに関わる好事例であり、今後のさらなる進展が期待される。

香川県坂出市立病院　経営健全化の取組について

坂出市立病院は、かつて 13 年連続赤字を計上し、累積欠損金が年間売上を超える約 25 億円に達し、平成 3 年には全国で 2 例目となる「廃院勧告」を受けた自治体病院である。しかし、存続を決定し、大規模な経営改革を実施。職員意識の刷新を出発点に、「経営の安定なくして良質な医療なし」を合言葉とし、視覚・聴覚両面からの啓発、数値目標の明確化、部会活動による職員参画などを通じて組織文化を転換した。

平成 26 年の新築移転後は急性期医療に特化し、救急車受入件数の増加、平均在院日数短縮、手術件数の倍増（移転当初 700 件→令和 6 年度 1600 件）を達成。医療レベル向上のための積極的な設備投資（無菌室拡充、透析機器更新等）も、費用対効果を精査し短期間で回収可能な案件に限定。結果として入院・外来収益は 10 年で 1.8 倍となり、令和 3〜5 年度はコロナ補助金も含め黒字を維持している。

特徴的なのは、収益向上を「目的」ではなく「良質な医療提供の手段」と位置付け、職員に理解させた点である。外来部門を軽視せず、患者ニーズに応える土曜外来も継続。市外患者の割合は入院で過半数に達し、近隣から選ばれる病院へと成長した。

医師・看護師確保では、大学医局との粘り強い交渉や看護学校での授業派遣によるリクルート、離職防止策を実施。ロイヤリティ醸成のためイベントや地域医療活動も積極展開している。

坂出市は人口約 4 万 8 千人、病床数 194 床と小規模ながら、令和 5 年度の入院・外来収益は 64 億円と、病床数 1.67 倍の十和田市立中央病院（67 億円）とほぼ同等。人件費率は 50%以下に抑え、黒字基調を維持している。

この事例は、①職員意識改革、②数値に基づく明確な目標管理、③費用対効果を踏まえた機動的投資、④患者ニーズ重視の診療体制、⑤人材確保と定着の戦略的取組、が経営健全化の鍵であることを示している。経営形態の変更よりも、中身の改革とリーダーシップこそが再建の要であると学んだ。

委員名	堰野端展雄

委員会行政視察報告書

委員会名	民生福祉常任委員会

活　動　委　員　名		
山田　洋子　委員長	太田　正幸　副委員長	氣田　量子　委員
堰野端　展雄　委員	小川　洋平　委員	

経　費　区　分				合計金額
1　研修旅費	2　自動車借上料等	3　議長交際費	一人当りの費用	
855,192		8,590	172,756	863,782

期　間 （年月日）	令和７年７月 22 日（火）　～　令和７年７月 24 日（木）　（２泊３日）
視察事項	・岡山県総社市　「子育て王国まちづくり事業について」 ・香川県坂出市　「坂出市立病院の経営健全化の取組について」
視察先	岡山県総社市、香川県坂出市

内容及び成果

総社市

第２次総合計画の後期基本計画において、「あなたにとって一番やさしいまち　そうじゃ」を目指し、５つの基本目標　だれもが安心して住み・働き・学び・集い・訪れたくなる総社を掲げ、目標人口 70,500 人（R7.６月現在 69,525）を目指し取り組んでいる。ちなみに、市役所としても「日本一やさしい市役所」を目指しているとのこと。

事業の「子育て王国」とは、行政や保育・教育関係者だけでなく、NPO や医師会、商工会や一人ひとりの市民など、街全体で子育てを支えるという理念を表して称しており、そうすることにより、市役所全体でそうあるべきとの矜持をもって施策に取り組めるよう、自らにプレッシャーを与える効果を生んでおり、政策の優先順位を決める際は、子どもを最優先にし、さらに市民に限らず子どもを大切にする取り組みを推進している。その結果、今の時代にあって人口は微増し、合計特殊出生率も 1.58 となんともうらやましい限りである。

「子育て王国そうじゃ」まちづくり実行委員会には当初、「子育て王国」応援団として、「子育て王国そうじゃ」の目的に賛同する小児科医や県立大教員など８名の個人が実行委員会の実行部隊として活動しており、行政主導ではなく市民主導型で活動しており、市民の意識の高さが伺えた。現在委員は産・官・学・民の 19 名で構成されているとのこと。

事業の成果としては、地域の特性を活かした多彩で魅力あふれる事業が展開でき、地域の中で困っている人がいたら手をさしのべ、助け合い、支えあう土壌を築いたところ、「子育て王国」だから総社市に転入してきた人が多くなったという。

また、令和６年４月から、妊娠期から子育て期までの包括的・継続的な支援体制を構築するため、それまでの「総社市子育て世代包括支援センター」と「子ども家庭総合支援拠点」を一体化した「総社市こども家庭センター」を設立し、様々な事業に取り組んでいた。特に「子育て世帯訪問

支援事業」、ヤングケアラーがいる世帯の支援として様々な問題に特段の配慮をしつつ取り組んでいるところなど、当市も見習わなければならないと思われた。

坂出市

坂出市立病院は平成3年が転換期であった。それは13年連続赤字を出し、累積欠損金が24.8億円となり、旧自治省（現総務省）から廃院勧告を受け、病院事業を存続するかやめるかの判断を迫られ、最終的には存続を選んだ。しかし、全職員へのアンケート調査では、謙虚な反省と積極的な意見は全くなかったようだ。「自分がやらなくても、誰かがやるだろう」、「親方日の丸、つぶれることはないだろうとの安易な打算」などが見られた。そこで、欠如していた部分の「赤字になるとなぜ困るのか」、「なぜ赤字になったのかの原因の分析・検証」、「問題の本質を見極め解決するプロセスの構築」、「正しい仕事の認識不足」つまり、公立病院職員として、権利は主張するが義務を果たさない、こういう風潮だから赤字体質なのだということを正しく認識することから始めた。まずは聴覚的なことで、職員の共通言語として「経営の安定なくして良質な医療なし」経営の安定は目的ではなく、良質な医療提供の手段であるとの認識。「変わらなきゃ」医療職のプロとは当たり前のことを当たり前に行える医療人であるとの認識。次に視覚的なことでは、休憩室などに「こんな勤務医はいらない8か条」「こんな看護師長はいらない9か条」を張り出し、聴覚・視覚に改革をしなければならないことを訴えた。また、香川県の公立病院では唯一、土曜日外来を医局の猛反対が有りながらも実施。約4000万円の利益となっているとのこと。このような改革のプロセスで職員の意識改革が進み、理想的組織風土への塾生がなされ、平成22年には優良自治体病院として総務大臣表彰を受賞した。

そののち市立病院は新築移転後、急性期病院へ舵を切り、医療機能・医療品質を表現する指標の数値化をし、実績を積み上げ、着実に業績を伸ばしている。そこにある原点は「良い医療を提供したければ利益を上げなければできない」との意識付けの徹底。

特筆すべきは、新型コロナウイルス感染症のときの対応だ。極力、患者さんの制限をかけず、コロナに対する国の補助金をなるべく貯蓄に回していたことだ。当市の市立病院はコロナの時、患者の制限をかけ、国の補助金が当たり前という、私としても甘い見通しだったのは事実。今となってはどうにもならないが、本当に悔やまれる。そうは言っても、現在、当市の市立病院は大変な状況にあるので、今回の坂出市立病院の改革プロセスを参考に、一刻も早い経営改善に向け努力していかなければならないと思わされた視察であった。

委員名	小川　洋平

委員会行政視察報告書

委員会名	民生福祉常任委員会

活　動　委　員　名		
山田　洋子　委員長	太田　正幸　副委員長	氣田　量子　委員
堰野端　展雄　委員	小川　洋平　委員	

経　費　区　分				合計金額
1　研修旅費	2　自動車借上料等	3　議長交際費	一人当りの費用	
855,192		8,590	172,756	863,782

期　間 (年月日)	令和７年７月 22 日（火）　～　令和７年７月 24 日（木）　（２泊３日）
視察事項	・岡山県総社市　「子育て王国まちづくり事業について」
	・香川県坂出市　「坂出市立病院の経営健全化の取組について」
視察先	岡山県総社市、香川県坂出市

内容及び成果

「総社市 子育て王国まちづくり事業について」

総社市は子供を最優先に位置づける政策を行い、福祉先進都市として注目を集めているところであります。

実際に子育て世代の流入もあり、人口が増加をしている現状があります。

この事業は、子供を中心に捉えた行政運営を行い、それに市、企業、地域が協働をする仕組みとなっています。

主な取組として、経済支援では、出産応援給付金、出産おめでとうギフト、あるいは中学生まで医療費無料、給食費無料等、親が子育てコストを徹底的に下げる政策を行っております。

他に、子育て環境の充実として、集いの広場、病児保育の整備、子育て相談体制の一元化(ワンフロア化)など、孤立させない、子育て環境を充実しているところです。

また、地域で子育てのためのまちづくりを行っております。

「子育て王国そうじゃ」まちづくり実行委員会や、市民、企業、医療、教育の連携や親子参加型イベントや体験授業等、行政だけではなく、社会全体で支援を行っております。

また子供主体子供会議や子供議会、子供たちの意見を政策に反映をしており、子供が主役のまちづくりも進めております。この事は少子化対策、あるいは若者の社会参画など総合的な政策として位置づけているところです。

また、これらの事は、子供に子育てに対する本気度を示しており、それを実行をすることにするために、制度化をしているものであって、理念だけではなくそのように実効性を伴うように計画をしたものであります。

また、教育、福祉、経済など横断的な考えも示しており、子育て政策が単独ではないということも、市民や社会に示しているところであります。

役所ばかりではなく、市民を巻き込む形として考えており、行政主導ではなく共創であると位置づけています。

このように子供を中心に社会全体を再設計したまちづくりとして、当市の子育て政策にも参考になると考えております。

「坂出市立病院の経営、健全化の取組について」

坂出市立病院は過去 13 年間連続赤字の病院でありました。

最大累積赤字約 25 億円となり、施設の老朽化、医療水準の低下、患者離れなど、地域全体の活力の低下にも影響を及ぼしていた病院であります。

これは、極端的な地方公立病院の失敗のモデルであります。

ここからの赤字脱却のために、特別な策ではなく、当たり前の徹底、そしてまた組織改革をすることによって徐々に赤字解消をしていくものであります。

当院では特別なことをしてきたわけではなく、全職員が病院の基本理念を念頭に、その実現に向けて当たり前のことを当たり前にしてきただけであると言う事ですが、なかなかその医師、職員の意識改革が、当市ではできていない部分があるのかなと思っているところであります。

具体的に健全化に取り組むために、患者中心の病院へ転換をしたと言うところでございます。

患者サービスの向上、地域から信頼される病院づくりのために邁進をしたと言うところです。その結果、患者数が増え、収益改善につながったとのことです。

また、医療の質の向上のために、親切レベルの底上げ、医師スタッフの専門性の強化をし、医療の質は経営の質という考え方のもと、スタッフが一生懸命に頑張ってきたところであります。

最大のポイントは職員の意識改革ではないかと言うことでございます。

病院の経営は全職員の仕事と位置づけ部門間の壁を排除しながら使命感を共有し、組織一体となって黒字の原動力となったと思います。

そして、また、無駄の徹底、排除する意識を持たせコスト意識の浸透、あるいは業務の見直し、効率化に職員が小さな改善の積み重ねを行ってきたというところです。

最大のポイントとしてはトップの決断であります。

市立病院は市民の負託に応えるべく医療福祉政策を実現しなければならない。

単に病院だけの発展を目的とするのではなく、常に自然体の中での役割を考え、市民が住んでいて良かったと思える、真の意味での市民のための病院、いわゆる『市民の病院』にならなければならないと考えているようでございます。

市民と職員が共に喜べる自治体病院ならではの医療システムを作り上げることこそが、坂出市立病院職員の使命であると言う意識を持ちながら、仕事に邁進をしているようです。

このように、十和田市も病院開設者並びに病院管理者が幾度となく話し合いを持たれてあると思いますが、市民のための病院としてこれからも運営していくためにはどのようにしていくのか、濃密な話し合いが持たれれば大変ありがたく思います。